JARI Research Journal

2026年
10月号

（一財）日本自動車研究所

JARI Research Journal　2026 年 10 月号

●一般記事

【トピックス】 「人とくるまのテクノロジー展」出展報告 p. 1〜 (9 p)

三井 寧史，宮本 祐子（企画・管理部） JRJ20261001

【トピックス】 つくばちびっ子博士 2026「JARI サマースクール」の開催報告 p. 10〜 (6 p)

柏倉 桐子，中野 麻耶，寺田 雄太郎（企画・管理部） JRJ20261002

【エッセイ】 青空菜花同好会活動紹介 p. 16〜 (4 p)

佐藤 佑香（環境研究部） JRJ20261003

「人とくるまのテクノロジー展」出展報告*

三井　寧史*1　　宮本　祐子*1
Yasushi MITSUI　　Yuko MIYAMOTO

公益社団法人自動車技術会（自技会）が主催する『人とくるまのテクノロジー展』（人テク展）は自動車業界の代表的なイベントとして，例年横浜および名古屋で開催されている．一般財団法人日本自動車研究所（JARI）は，2026 年度の人テク展において，両会場へ出展し，研究成果や試験設備の紹介を行った．本出展は，JARI の知名度およびプレゼンス向上を目的として実施したものである．横浜展および名古屋展の比較を含めた出展結果について報告する．

KEY WORDS: 自動車技術会（自技会），人テク展，DX，モビリティ

1. はじめに

1.1　『人とくるまのテクノロジー展』の概要

公益社団法人自動車技術会（自技会）が主催する 2026 年度の『人とくるまのテクノロジー展』（人テク展）は，「Collaboration for Future Mobility　モビリティは，ここから変わる」がメインテーマとなり，各企業／団体の一般展示や自技会の企画展示が行われた．神奈川県横浜市，愛知県常滑市の 2 地域での開催となり，5 月 27 日～29 日の YOKOHAMA 展はパシフィコ横浜の展示ホール・ノース，6 月 17 日～19 日の NAGOYA 展は Aichi Sky Expo（愛知県国際展示場）にて開催された（表 1）．

表1　人テク展 YOKOHAMA・NAGOYAの概要

名称	人とくるまのテクノロジー展 2026　YOKOHAMA Automotive Engineering Exposition 2026 YOKOHAMA	人とくるまのテクノロジー展 2026　NAGOYA Automotive Engineering Exposition 2026 NAGOYA
会場	パシフィコ横浜　展示ホール・ノース	Aichi Sky Expo（愛知県国際展示場）
会期	5 月 27 日（水）～ 5 月 29 日（金）3 日間 10:00 ～ 17:00	6 月 17 日（水）～ 6 月 19 日（金）3 日間 10:00 ～ 17:00
展示規模	612 社，約 1,516 小間　※共同出展社を含む	541 社，1,118 小間　※共同出展社を含む
展示総面積	展示ホール 20,000 m^2・ノース 6,300 m^2	約 26,000 m^2
来場者数	80,493 名（主催者発表）	34,227 名（主催者発表）
来場対象者	自動車・部品・車体メーカーの設計／研究／実験／開発の技術者・研究者，生産技術・品質管理／技術管理／購買部門の担当者，公的研究機関の技術者・研究者，自動車周辺企業の技術関係者，大学／専門学校／工業高校の教職員・学生など	
ロゴマーク	人とくるまのテクノロジー展 2026 Automotive Engineering Exposition 2026 YOKOHAMA	人とくるまのテクノロジー展 2026 Automotive Engineering Exposition 2026 NAGOYA

＊ 2026年9月15日受理
＊1 一般財団法人日本自動車研究所　企画・管理部

1.2　人テク展へのJARIの出展目的と集客結果

一般財団法人日本自動車研究所（JARI）は，知名度およびプレゼンスの向上を図るとともに，JARI の研究活動や最新の研究成果，保有する試験設備について広く情報発信することを目的として，自動車業界の代表的な展示会である人テク展に出展した．主対象は，自動車メーカーおよび自動車部品メーカーとしつつ，YOKOHAMA 展では同時期にパシフィコ横浜で開催された自技会春季大会に参加する研究者・学術機関関係者・学生，NAGOYA 展では西日本からの来場者も対象とした．

集客の結果を表 2 に示す．展示ブースへの来場者数は，バーコードリーダーで名札の QR コードを読み込むことでカウントした．表 3 に示すように，ブース来場者の約 90%以上が新規来場者であり，出展目的の一つである「JARI のプレゼンス向上」の場として有効であったと考えられる．また，展示ブースでは公式 SNS のフォロー案内も実施し，SNS を通じた継続的な情報発信につながる成果も得られた．なお，NAGOYA 展での出展社セミナー（6 月 19 日 15:00～，1 枠）には 32 名の参加があった．

表2　JARI展示ブースへの集客目標と結果

参加年度		2023 年度	2024 年度	2025 年度 [1)]		2026 年度	
開催地		YOKOHAMA 展			NAGOYA 展	YOKOHAMA 展	NAGOYA 展
展示ブースの広さ（小間数）		6 m×3 m（2 小間）					
展示ブース来場者数	目標	－	－	800 名	400 名	1,000 名	800 名
	結果	648 名	763 名	1,001 名	761 名	1,048 名	815 名
期間中の SNS	目標	－	－	30 名	15 名	15 名	15 名
フォロワー増加数	結果	－	－	3 名	1 名	19 名	12 名

表3　ブース来場者の新規・既存来場者の割合

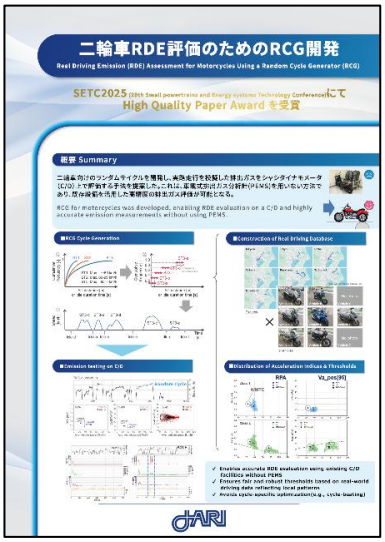
	YOKOHAMA 展	NAGOYA 展
来場者数	1,048 名	815 名
新規来場者	972 名	769 名
リピーター	76 名	46 名
新規割合	92.7%	94.4%

2. JARI展示ブースのねらいと出展内容

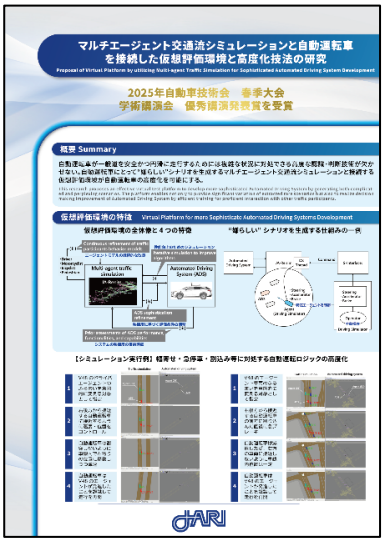
展示ブースでは，パネル展示，映像による研究事業および試験設備の紹介，城里テストセンター（STC）模型の展示をした．また，展示物の紹介だけにとどまらないよう，ミニプレゼンテーションも併せて実施した．出展小間数が二つと限られたスペースとなったが，展示パネルエリアと STC 模型展示エリア，ミニプレゼンエリアに分けた．

展示パネルは，受賞研究の紹介 2 枚，研究設備・試験施設の紹介 1 枚，自動走行分野 1 枚，安全分野 1 枚，環境分野 1 枚の 6 枚とした．内容は，自技会の企画展示のテーマである「新しい技術との融合で創る クルマとモビリティの未来 ―DX と共創で革新する自動車技術―」に沿うものとし，JARI で実施している研究事業で DX（Digital Transformation：デジタル技術を用いて企業や社会のあり方を大きく変革すること）に繋がると考えられる，主にシミュレーションに関わるテーマを採用した．以下に各研究部のパネルについて表題とパネルイメージを示す（図 1）．

STC 模型展示は，昨年度改修した模型を利用して，高速周回路が 3 車線から 5 車線に拡幅され，様々な試験シナリオに対応できるようになったことを来場者へ訴求した．



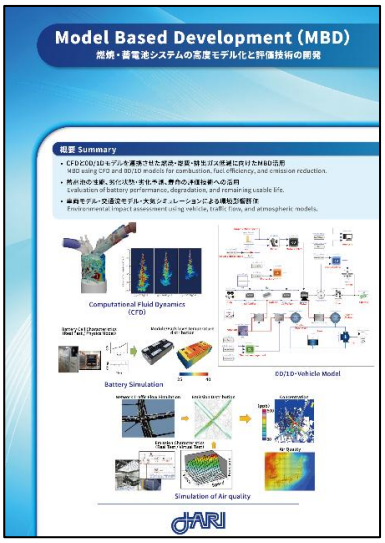
a) 受賞研究の紹介
二輪車RDE評価のためのRCG開発



b) 受賞研究の紹介
マルチエージェント交通流シミュレーションと自動運転車を接続した仮想評価環境と高度化技法の研究

c) 研究設備・試験施設の紹介
自動運転評価等のコースとリアル試験

d) 自動走行分野の研究紹介
電動車両シミュレーション基盤の構築



e) 環境分野の研究紹介
Model Based Development（MBD）
燃焼・蓄電池システムの
高度モデル化と評価技術の開発

f) 安全分野の設備紹介
安全分野に関わる各種試験設備

図1　掲示したパネルのイメージ

3. YOKOHAMA展およびNAGOYA展の出展の詳細

3.1　YOKOHAMA展

YOKOHAMA 展には, 3 日間を通して 80,493 名が来場し, JARI 展示ブースには, 集客目標である 1,000 名を超える 1,048 名が訪れた（表 2）．来場者の所属の割合は，自動車メーカー・自動車部品メーカー・試験計測器メーカーで約半数を占めた．図 2 にパネル展示と説明の様子を，図 3 にミニプレゼンの様子を示す.

15 分間のミニプレゼンは多くの来場者が行き交う場所で実施できたこともあり, 来場者が足を止めて聴講する様子が多く見受けられた．プログラムによっては通路側まで聴講者が集まり, JARI の研究活動や取組みに対する高い関心がうかがえた．ミニプレゼンのプログラムを表 4 に示す.

図2　パネル説明の様子（YOKOHAMA展）

図3　ミニプレゼンの様子（YOKOHAMA展）

表4　YOKOHAMA展のミニプレゼンプログラム

日時	タイトル	発表者の所属と氏名
5 月 27 日 10:30～	SCS [注1] 対策評価制度への JARI の取り組み	認証センター 中山 孝明
5 月 27 日 11:45～	二輪車 RDE [注2] 評価に向けた Random Cycle Generator の開発と検証	環境研究部 松岡 正紘
5 月 27 日 13:00～	電動・自動運転車シミュレーション基盤構築への取り組み	自動走行研究部 加藤 良祐
5 月 27 日 14:30～	「ADAS [注3] 試験は“走路だけ”では成立しない」 ～STC が目指す次世代試験環境～	城里テストセンター 冨田 信道
5 月 27 日 15:30～	外出目的の創出と地域連携を通じた中山間地域における移動のあり方について	新モビリティ研究部 浅田 崇之
5 月 27 日 16:30～	安全性能評価を支える各種試験設備のご紹介	安全研究部 齊藤 全央
5 月 28 日 10:30～	安全性能評価を支える各種試験設備のご紹介	安全研究部 笈川 尚大
5 月 28 日 11:45～	トレーニング・コンサルティング事業 機能安全/サイバーセキュリティ/SOTIF [注4] のご紹介	新モビリティ研究部 佐藤 純
5 月 28 日 13:00～	SCS 対策評価制度への JARI の取り組み	認証センター 船橋 亮
5 月 28 日 14:30～	特異環境試験場の降雨装置の機能追加のご紹介	自動走行研究部 大崎 耕司
5 月 28 日 15:30～	JARI におけるエンジン燃焼シミュレーションの取り組み	環境研究部 伊藤 貴之
5 月 28 日 16:30～	SCS 対策評価制度への JARI の取り組み	認証センター 船橋 亮
5 月 29 日 10:30～	「 " 走れる " だけでは足りない」 ～自動運転時代の実走試験を支える JARI ドライバー訓練～	城里テストセンター 冨田 信道
5 月 29 日 11:45～	SAKURA プロジェクト紹介 自動運転システムの安全性評価基盤開発および国際標準化活動	自動走行研究部 中村 弘毅
5 月 29 日 13:00～	二輪車 RDE 評価に向けた Random Cycle Generator の開発と検証	環境研究部 松岡 正紘
5 月 29 日 14:30～	トレーニング・コンサルティング事業 機能安全/サイバーセキュリティ/SOTIF のご紹介	新モビリティ研究部 佐藤 純
5 月 29 日 15:30～	安全性能評価を支える各種試験設備のご紹介	安全研究部 野口 陽平
5 月 29 日 16:30～	SCS 対策評価制度への JARI の取り組み	認証センター 石川 雅英

注1　Supply Chain Security：サプライチェーン強化に向けたセキュリティ対策評価制度
注2　Real Driving Emission：路上走行時の排出ガス
注3　Advanced Driver-Assistance Systems：先進運転支援システム
注4　Safety Of The Intended Functionality：意図した機能の安全性

3.2　NAGOYA展

NAGOYA 展には，3 日間を通して 34,227 名が来場した．JARI 展示ブースへの来場者も集客目標である 800 名を超える 815 名となった（表 2）．

来場者構成は YOKOHAMA 展と同様の傾向を示したが，自動車メーカーよりも自動車部品メーカーの割合が高かった．また，2025 年度と比較して 10 代の来場者数が増加していた．ブースでの対話内容等から，その多くは中部地域の高校生や学生であったと考えられ，クルマ社会を担う次世代への情報発信という観点でも一定の効果があったものと考えられる．

YOKOHAMA 展では，ミニプレゼンが来場者とのコミュニケーションに有効であることが確認できた一方，会期終了間際のプログラムは聴講者が少ない傾向が見られたため，NAGOYA 展では当該時間帯の実施を取りやめ，プログラム構成を見直した．図 4 にパネル展示と説明の様子，図 5 にミニプレゼンの様子を示す．また表 5 にミニプレゼンプログラムを示す．

図4　パネル説明の様子（NAGOYA展）

図5　ミニプレゼンの様子（NAGOYA展）

表5　NAGOYA展のミニプレゼンプログラム

日時	タイトル	発表者
6 月 17 日 10:30～	車載用蓄電池の安全性評価に関する取り組みと評価設備のご紹介	環境研究部 後藤 翼
6 月 17 日 11:45～	トレーニング・コンサルティング事業 機能安全/サイバーセキュリティ/SOTIF のご紹介	新モビリティ研究部 佐藤 純
6 月 17 日 13:00～	電動・自動運転車シミュレーション基盤構築への取り組み	自動走行研究部 寺西 翔一朗
6 月 17 日 14:30～	SCS 対策評価制度への JARI の取り組み	認証センター 船橋 亮
6 月 17 日 15:30～	「ADAS 試験は“走路だけ”では成立しない」 ～STC が目指す次世代試験環境～	城里テストセンター 冨田 信道
6 月 18 日 10:30～	安全性能評価を支える各種試験設備のご紹介	安全研究部 雨海 みら
6 月 18 日 11:45～	SCS 対策評価制度への JARI の取り組み	認証センター 石川 雅英
6 月 18 日 13:00～	燃料電池自動車に欠かせない高圧水素容器に対する各種設備と評価事例のご紹介	環境研究部 高橋 研人
6 月 18 日 14:30～	「 " 走れる " だけでは足りない」 ～自動運転時代の実走試験を支える JARI ドライバー訓練～	城里テストセンター 冨田 信道
6 月 18 日 15:30～	外出目的の創出と地域連携を通じた中山間地域における移動のあり方について	新モビリティ研究部 淺田 崇之
6 月 19 日 10:30～	SCS 対策評価制度への JARI の取り組み	認証センター 石川 雅英
6 月 19 日 11:45～	「ADAS 試験は“走路だけ”では成立しない」 ～STC が目指す次世代試験環境～	城里テストセンター 冨田 信道
6 月 19 日 13:00～	安全性能評価を支える各種試験設備のご紹介	安全研究部 柳沢 克旭
6 月 19 日 14:30～	JARI の環境総合評価における取り組み	環境研究部 金成 修一

また，NAGOYA 展では展示ブースに加え，出展社セミナーを活用した研究発表も実施した．出展社セミナーは，出展社が 30 分間のプレゼンテーションを通じて技術や研究内容を紹介するプログラムである．JARI は最終日のセミナーにおいて研究内容を発表し，32 名が聴講した．展示ブースでは限られた時間での説明となるが，セミナーでは研究の背景や成果について体系的に紹介することができ，研究内容への理解促進を図る機会となった（図 6）．表 6 に出展社セミナーのプログラムを示す．

図6　出展社セミナーの様子（NAGOYA展）

表6　NAGOYA展の出展社セミナープログラム

日時	タイトル	発表者
6 月 19 日 15:00～15:30	NEDO GI 電動･自動運転車開発を加速するデジタル技術基盤の構築	自動走行研究部 加藤 良祐

3.3　YOKOHAMA展とNAGOYA展の比較

YOKOHAMA 展および NAGOYA 展のいずれにおいても集客目標を達成し，多くの来場者に JARI の研究活動や試験設備を紹介する機会となった．

YOKOHAMA 展では，同時期に開催された自動車技術会春季大会の参加者も多く来場しており，研究者や学術機関関係者，学生などの来場が目立った．そのため，研究内容に関する専門的な質問や意見交換が多く，JARI の研究活動や最新の成果を広く発信する場として有効であった．また，会場全体の来場者数も多く，展示ブースやミニプレゼンに対して高い関心が寄せられた．

一方，NAGOYA 展では，中部地区の自動車メーカーや自動車部品メーカーの技術者を中心とした来場者が多く，現場で開発や試験評価に携わる方々との意見交換を行うことができた．また，自動車部品メーカーの割合が高い傾向が見られたほか，高校生を含む若年層の来場も見られ，幅広い層に対して JARI の研究活動を紹介する機会となった．さらに，来場者と個別にコミュニケーションを取る時間を確保しやすく，研究内容や試験設備について詳しく説明することができた．

これらの結果から，YOKOHAMA 展は研究者・学術関係者への情報発信および研究交流の場として，NAGOYA 展は自動車関連企業の技術者や若年層への情報発信の場として，それぞれ異なる特徴を有していることが確認できた．

4. おわりに

2026 年度も，自動車業界の代表的な展示会である『人とくるまのテクノロジー展』の YOKOHAMA 展および NAGOYA 展の両会場へ出展し，多くの来場者に対して JARI の研究活動や試験設備を紹介することができた．その結果，JARI の知名度向上およびプレゼンス向上に一定の効果があったものと考えられる．

特に NAGOYA 展では，中部地区を中心とした自動車メーカー，自動車部品メーカーからの来場者に対して情報発信を行う機会となった．JARI の活動内容や保有設備について理解していただくとともに，新たな関係を構築できる貴重な機会となったと考えられる．

今後の出展イベントにおいても，JARI の研究成果や技術的知見を継続的に発信し，自動車業界のみならず幅広い分野との連携促進に取り組みたい．また，来場者とのコミュニケーションを通じて得られた意見や要望を今後の広報活動や展示企画に活かし，より効果的な情報発信を目指していく．

最後に，JARI ブースへ来場いただいた皆様に深謝申し上げる．本出展が JARI の研究活動への理解を深める一助となれば幸いである．

参考文献

1) 三井寧史, 宮本祐子: 『人とくるまのテクノロジー展』出展報告, JARI Research Journal, Vol. 2025, No. 9, JRJ20250903 (2025), doi: 10.60458/jarijrj.JRJ20250903

つくばちびっ子博士 2026 「JARI サマースクール」の開催報告*

柏倉　桐子*1　Kiriko KASHIWAKURA
中野　麻耶*2　Maya NAKANO
寺田　雄太郎*2　Yutarou TERATA

つくば市が主催している「つくばちびっ子博士 2026」に一般財団法人日本自動車研究所（JARI: Japan Automobile Research Institute）も参加した．つくばちびっ子博士は全国の小学生・中学生を対象にした夏休み向けの催しである．参加する子供達はつくば市内の研究所や文化施設，企業などが開催するイベントに参加，あるいは動画を視聴して楽しく学びながらバッジを獲得する．また，貯まったバッジ数に応じてつくばちびっ子博士の称号が得られる．JARI では，2026 年 8 月 7 日に「JARI サマースクール」としてイベントを開催し，三つのプログラムを実施した．また，子供向けの JARI 紹介動画を作成し，「つくばちびっ子博士 2026 専用サイト」に掲載した．

KEY WORDS: つくばちびっ子博士，ワイヤレス給電，自動運転，交通安全，衝突実験用ダミー人形

1. はじめに

つくば市は全国の小・中学生に向けた夏休みの催しとして，1999 年から「つくばちびっ子博士」を開催している．この催しは，子供達がつくば市内の研究機関や企業，文化施設を見学したり，参加機関が提供する動画資料を視聴したりすることで，様々な科学技術や文化について「楽しく学ぶ」ことを目的としている．子供達はスマートフォンなどの端末を利用して「つくばちびっ子博士 2026 専用サイト」[1)]（専用サイト）に登録し，見学先に掲示された合言葉を集めたり，動画資料を視聴してクイズに回答したりすることでバッジを獲得する．更に，獲得したバッジ数に応じて，「つくばちびっ子博士」「優秀つくばちびっ子博士」「最優秀つくばちびっ子博士」の認定を受ける．

一般財団法人日本自動車研究所（JARI: Japan Automobile Research Institute）は 2019 年度まで継続的につくばちびっ子博士に参加していたが，新型コロナウイルス感染症の流行を契機に実施を見合わせていた．今回は 7 年ぶりの参加となり，地域および社会への貢献の他，JARI の認知度向上，およびモビリティファンの裾野拡大を目的として再開した．参加にあたっては，つくば事業所の環境研究部，自動走行研究部，安全研究部に協力を依頼し，2026 年 8 月 7 日に「JARI サマースクール」として三つのプログラムを実施するイベントを開催した．さらに，つくばちびっ子博士 2026 の開催期間中（2026 年 7 月 18 日～8 月 31 日），専用サイトに掲載される各参加機関の動画として，子供向けの JARI 紹介動画を作成した．本稿では JARI サマースクールの開催結果と作成した JARI 紹介動画について報告する．

2. JARI サマースクール

JARI サマースクールは気温が高い夏季の開催であるため，安全に配慮してつくば事業所の本館会議室で開催し，各研究部が企画した三つのプログラムを実施した．環境研究部では「ワイヤレス給電でミニ四駆を走らせてみよう！」，自動走行研究部では「人の不思議実験から自動運転と交通安全を考えよう！」，安全研究部では「運転者目線で見た危険や衝突実験用のダミー人形について学ぼう！」を実施した．これらのプログラムは同じ内容で午前と午後にそれぞれ 1 回ずつ実施した．

＊ 2026年9月7日受理
＊1 一般財団法人日本自動車研究所　企画・管理部 博士（工学）
＊2 一般財団法人日本自動車研究所　企画・管理部

2.1　ワイヤレス給電でミニ四駆を走らせてみよう！（環境研究部）

環境研究部では，ワイヤレスで非接触なのにどうして車に電気が届くのか，ワイヤレス給電の仕組みを楽しく学び，未来の車を体感するプログラムを実施した．

初めにワイヤレス給電の基本的な仕組みについて解説を行った．その後，参加者は説明を受けながらミニ四駆®にワイヤレス給電キットを取り付ける改造作業に挑戦した．真剣な表情で作業に取り組む参加者に対し，環境研究部の研究員や技師が作業に協力して一人ひとりの進捗に合わせたきめ細やかなサポートを行った．改造作業が完了した後は，城里事業所の城里テストセンターの高速周回路を模した楕円形のオーバルコースで走行実験を行った．コイルの巻き方によってはうまく走行できないこともあり，参加者は給電技術への理解を深めると共に，工作精度の重要性も実感している様子であった．

図1　ワイヤレス給電の仕組みを学び，工作と走行実験に挑戦

2.2　人の不思議実験から自動運転と交通安全を考えよう！（自動走行研究部）

歩行中の交通事故による死傷者数は 7 歳児が多い[2] ことから，自動走行研究部のプログラムでは小学校低学年の子供とその保護者を対象として親子で交通安全について考える機会となることを目指した．

初めに，参加者である子供と保護者が共に心理学の知見を基にした実験を体験した．これにより，人は注意深く行動しているつもりでも見落としや思い込みが生じることを実感し，人間の特性を理解した上で，交通場面における危険や安全な行動について考えることを期待した．

交通事故を防ぐためには，人が間違いを起こすことを前提として安全を考えることが重要である．そのため，人の見落としや思い込みを補い，安全な移動を実現する技術の例として，自動運転技術における運転支援機能について説明した．さらに，説明した研究員が作成に協力した日本放送協会のみんなのうた「てて！とまって！」[3] を教材とし，子供が横断歩道を渡る際の行動について，気を付けるべき点を解説した．最後に，交通安全に関する知識や意識は，今回のプログラムを一度受講しただけで大きく変わるものではないことを伝えた．そのため，帰宅後も家庭内で交通安全について話し合い，日常生活の中で継続的に安全意識を高めて欲しいことを呼びかけた．

図2　説明を受けて心理学実験に取り組む

2.3　運転者目線で見た危険や衝突実験用のダミー人形について学ぼう！（安全研究部）

安全研究部では，簡易な運転シミュレーターおよび衝突実験用のダミー人形を活用し，事故の予防や衝突安全について学ぶ体験プログラムを実施した．プログラムでは，参加者を二つのグループに分け，一方は運転シミュレーターの体験，もう一方はダミー人形の分解・組み上げ体験を行った．その後，グループを入れ替えることで，全員がどちらも体験できるような構成とした．

運転シミュレーターの体験では，参加者がハンドルを握り，前面のモニター画面を見ながら足元のブレーキやアクセルを操作して自動車の運転を疑似的に体験した（図 3）．歩行者の飛び出しや自転車のふらつき走行に対応することで，これらの行動が運転者にとっていかに危険であるかを学んだ．また，制限速度を維持しながら運転することや車線を変更することの難しさを実感し，日頃運転を行う保護者に対して尊敬の念を示す参加者の姿も見られた．

ダミー人形の分解・組み上げ体験では，衝突試験では様々な乗員を想定するため，ダミー人形には性別や年齢など，条件に応じた種類があることを説明した（図 4）．また，衝突時の衝撃を計測するため，ダミー人形の内部には多数のセンサーや計測機器が組み込まれていることについても紹介した．次に，参加者は説明を受けながらドライバーを使って手足の交換作業を行い，部品の大きさや重量を実際に体感した．最後に，ダミー人形の専用スーツを着用し，ダミー人形との記念撮影を楽しんだ．

図3　運転シミュレーターを用いて車の運転を疑似体験

図4　衝突実験用ダミー人形の説明を聞いて部品を交換

2.4　開催結果

本イベントの参加者は 7 月初旬に JARI のホームページを通じて募集した．応募総数は 93 名で，定員以上の申し込みがあったプログラムについては抽選で参加者を決定した．決定した参加者は 54 名，当日の参加者は 42 名であった．

プログラムの終了後，参加者にアンケートを配布して感想等を収集した．アンケートの質問と結果をまとめて図 5 に示す．参加者 42 名中，つくば市内の居住者は約 8 割の 34 名で最多となり，地域貢献という観点で意義のある結果になった．JARI のことを以前から知っていたかの質問については，「ちびっ子博士で知った」という回答が約 6 割の 26 名を占め，つくばちびっ子博士に参加することは JARI の認知度向上に効果があることが伺えた．参加理由については複数回答を可とし，「プログラムが面白そうだった」との回答が約 4 割の 18 名と最も多かった．このため，参加者の募集時にはプログラムの魅力を伝えることが重要であることが示唆された．プログラム内容への理解度については，概ね良好な評価が得られたものの，「とても分かりにくかった」という回答が 1 名あった．一方で，親切さについては全ての参加者から普通以上の評価が得られており，職員の真摯な対応は伝わっていたと推察できた．プログラムへの参加によって車のことをもっと知りたくなったかという質問に対しては，「とてもそう思った」と「そう思った」が合わせて約 9 割の 37 名となり，将来のモビリティファンの裾野拡大としても効果があったと考えられた．最後に設けた「自由に感想や意見を教えてください」という自由記述の質問には，「楽しかった」という素直な感想の他，「もっと知りたい」との希望も寄せられた（表 1）．

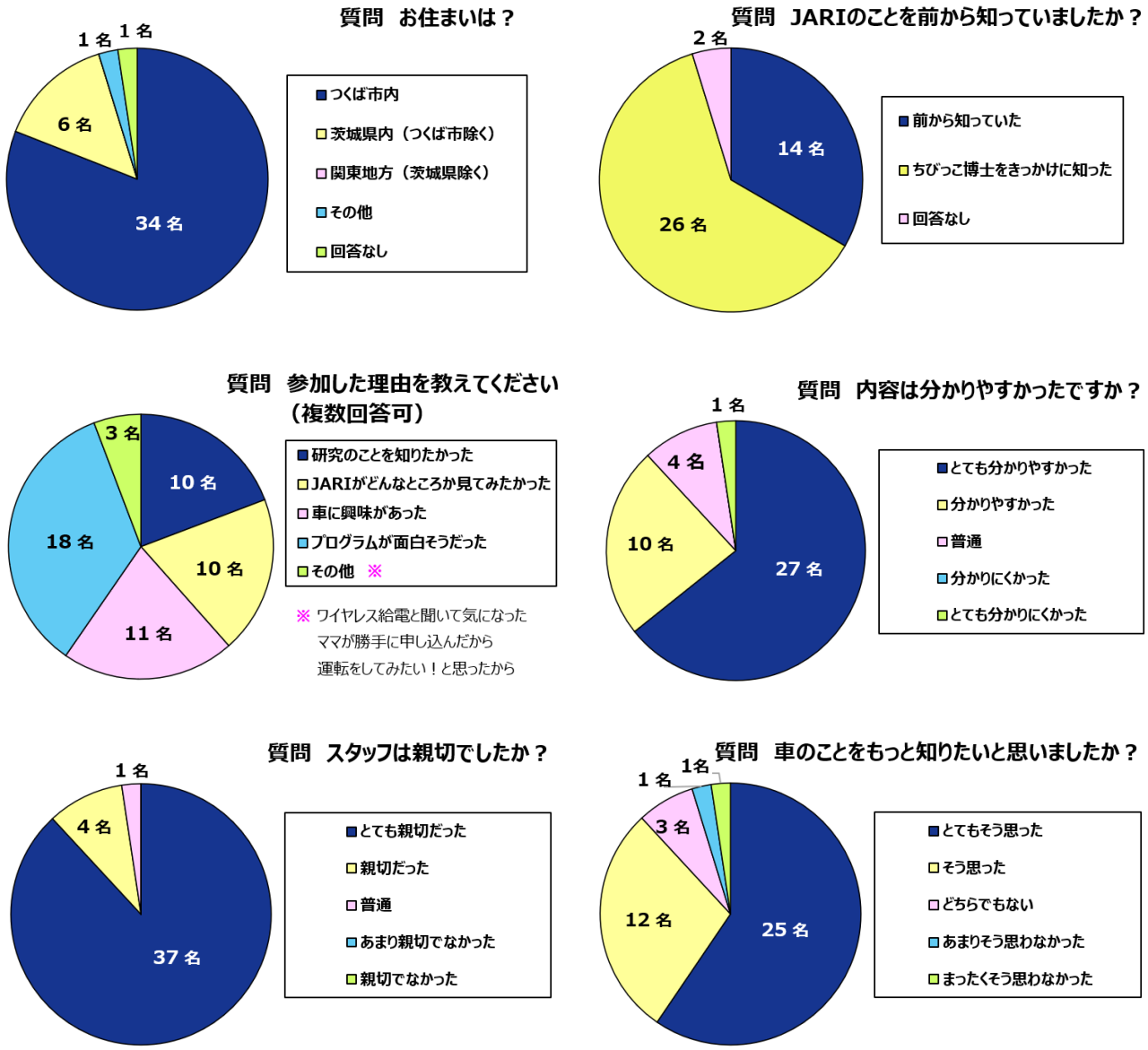


図5　プログラム参加後のアンケート結果（参加者42名）

表1　参加者から寄せられた主な感想や希望

プログラム	感想・意見	学年
環境研究部 ワイヤレス給電で ミニ四駆を走らせてみよう！	丁寧に教えてもらってとても良かったです． 初めてミニ四駆を作って作るのが大変だったけどとても楽しかったです．	小学6年生
	電池がなくてもワイヤレス給電でミニ四駆が走るのがすごいと思いました． とても楽しかったです．	小学4年生
	わかりやすくて楽しかったです． ワイヤレス給電をもっと知りたいです．	小学5年生
	車もプラモデル作りも好きなので参加できてとても良かったです． JARIの研究内容や施設のことも是非知りたいです．	小学4年生
	普通はあまり出来ないことを体験できてとても楽しかったです．	小学6年生
自動走行研究部 人の不思議実験から 自動運転と交通安全を考えよう！	ててとまってを見られてよかった． NHKテレビで見たことがある動画だったので話を聞きやすかった．	小学2年生
	自動運転や心のお勉強がとても面白かったです． 自動運転の車に乗ってみたいです．	小学3年生
	不思議実験が一番面白かった．	小学2年生
	実験と「てて！とまって！」の歌が楽しかったです．	小学1年生
	自動運転がびっくりした．	小学2年生
安全研究部 運転者目線で見た危険や 衝突実験用のダミー人形について 学ぼう！	運転者目線で見ると、かなり逆走が危険ということが分かった． また運転は難しかった．	小学6年生
	ねじをくるくる回すのも良かった～！	小学5年生
	普段ではできないような運転や，実物の人形を見れて楽しかった．	中学1年生
	車をゲームで運転できて楽しかった． ダミー人形について分かった．	小学5年生
	実際にシミュレーションで運転をしてみて、暗いと自転車、歩行者は見えにくいことが分かったから気をつけていきたい．	中学1年生

3. JARI紹介動画

つくばちびっ子博士では，研究機関等が作成・公開している動画または新たに作成した動画を専用サイトに掲載し，参加者が視聴後のクイズに答えて正解するとバッジを付与している．JARI は市に依頼して子供向けの JARI 紹介動画を作成し，公開した（図 6）．ちびっ子博士の開催期間に視聴された回数は約 280 回となり，JARI サマースクールに参加できなかった子供達にも JARI の研究を紹介することが出来た．

図6　「つくばちびっ子博士2026専用サイト」に掲載されたJARI紹介動画の画面

4. おわりに

今回のつくばちびっ子博士への参加は 7 年ぶりであった．また，気温が高い夏季の開催であるため，安全に配慮して開催場所を本館会議室に限定した．参加者が実験設備等を直接目にすることはなかったが，アンケートの結果から，JARI の研究の一端に触れて，開催目的の通り「楽しく学ぶ」ことが出来たと推測される．次年度もつくばちびっ子博士に継続して参加し，子供達が JARI と自動車の研究について楽しく学び，モビリティへの興味・関心を醸成する良い機会となるよう取り組んでいく．

参考文献

1) つくば市: つくばちびっ子博士2026専用サイト, https://hakase.city.tsukuba.lg.jp/pre/index.php, (参照 2026-09-7)
2) 警察庁交通局: 令和 7 年春の全国交通安全運動の実施について (2025), https://www.npa.go.jp/news/release/2025/R7harunoundou_koutuujikobunseki.pdf , (参照 2026-09-7)
3) 日本放送協会:「てて て！とまって！」横断歩道の渡り方を覚えよう！, https://edu.web.nhk/school/watch/clip/?das_id=D0005450242_00000, (参照 2026-09-7)

【エッセイ】

青空菜花同好会活動紹介*

佐藤　佑香*1
Yuka SATO

一般財団法人日本自動車研究所（JARI: Japan Automobile Research Institute）では，さまざまな同好会が活動しています．「青空菜花同好会（あおぞらさいかどうこうかい）」もその一つです．本同好会は，花や野菜を育てながら園芸活動を楽しむことを目的としています．2022 年に発足した比較的新しい同好会ですが，JARI の同好会のなかで最も多くの会員を擁しており 40 名ほどで活動しています．会員は育てたい花や野菜を選び，仕事が終わった後や昼休み，休日に自分のペースで植え付けや手入れをしながら，花や野菜の成長を見守っています．活動場所は，つくば事業所（以後，つくば）と，城里事業所（以後，城里）です．つくばには複数の活動場所があります（図 1）．研究学園駅に近い北門付近の農園（以下，北門ガーデン）は最も広く，野菜や果物を中心に育てています（写真 1）．正門側のエンジン棟の花壇では，ユリやヒマワリ，チューリップなど，季節を彩るさまざまな花を中心に育てています．同じく正門側の安全棟の周辺では，パイナップルやキノコ（写真 2），夏野菜などを育てています．昨年からは，城里の広い事業所の中でも畑を耕し，活動の幅を広げています．これらの場所では，ビオラ，ペンタス，マリーゴールドをはじめとする色とりどりの花を育てています．野菜についても，ゴーヤ，キュウリ，里芋，ミニトマト，アスパラガス，ジャガイモ，スイカ，イチゴ，カボチャ，長ネギ，ニンニク，カブなど，多種多様な野菜づくりに取り組んでいます．収穫した野菜を使った料理を，会員同士でチャットを通じて紹介しあうことも，活動の楽しみの一つです（写真 3）．このように，花や野菜の手入れや収穫，会員同士の交流など，季節ごとにさまざまな活動を行っています．今後は，新たに東京事業所でも活動する予定です．

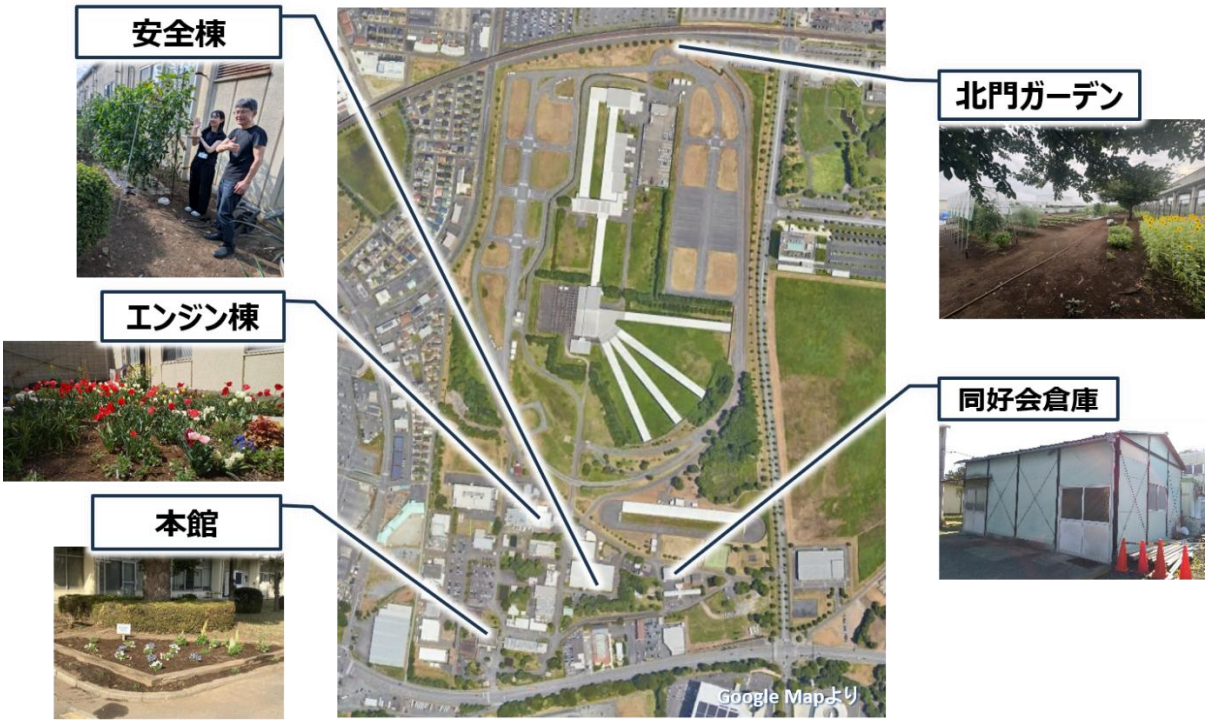


図1 つくば構内の活動場所

＊ 2026年8月28日受理
＊1　一般財団法人日本自動車研究所　環境研究部

写真1 北門ガーデンで収穫された野菜（左）と満開に咲いた向日葵（右）

写真2 安全棟の原木椎茸

写真3 チャット内の料理紹介

ここからは，そのなかでも印象に残っている活動を振り返ります．まずは 4 月の後半に企業関係者や一般の方に向けて JARI の研究内容を紹介する「JARI 技術フェア」[1] と「JARI Open Day」[2] に向けた取り組みです．開催時期に合わせ，エンジン棟の花壇ではチューリップが咲くように手入れをしています（写真 4）．毎年多くの来訪者がチューリップを背景に写真撮影を楽しんでいます．色ごとに開花時期が異なるため，イベント時期に見頃を迎えた後もしばらく春らしい景観を楽しむことができます．夏を迎えると，北門ガーデンを中心に夏野菜の収穫が始まります．毎年楽しみにしているのがスイカの収穫です．昨年は，両手で抱えるほど大きく，ずっしりと重い立派なスイカが実りました．なかには収穫間際にカラスに食べられたスイカもありました．収穫したばかりの新鮮なスイカを各部署で分け，昼休みに所員の皆さんと美味しくいただきました．スイカを囲み，普段は接する機会の少ない所員同士が一緒に味わうことで自然と会話が生まれ，交流の輪が広がりました（写真 5）．秋には北門ガーデンで芋掘り大会を開催します．会員だけではなく，その家族や一般所員も休日に集まり，朝から昼過ぎまでそれぞれのペースで芋掘りを楽しみます（写真 6）．昨年は約 20 名が参加しました．紅はるかや安納芋，シルクスイーツなど品種も豊富で，チャットでの料理紹介も盛り上がりました．

ここで私自身の活動も紹介します．私は，2025 年 5 月にエンジン棟の花壇でゴーヤの苗を 2 株，サトウキビの苗を 1 株植えました．土を整えて支柱を設置したところ，無事に芽が出て，茎も順調に伸びました．ゴーヤは綺麗な黄色い花を咲かせ，9 月ごろに実を付けました．収穫した実は美味しくいただきました．一方，サトウキビも順調に成長しました．亜熱帯地域の植物であるため，つくば市の寒い冬を越すのは難しいだろうと思いながらも，越冬に挑戦してみました．春を迎え，冬を越したサトウキビを収穫して食べてみると，糖分がアルコール発酵を経て酢酸発酵まで進んだらしく，酸っぱくなってしまっていました．この経験を通じて，植物にはそれぞれ適した気候があることを改めて実感しました．苗を植えたり，耕運機を使って土を耕したりするなど，普段の生活ではなかなかできない貴重な体験もできました．水やりを継続する大切さや，野菜の状態を観察しながら収穫に適した時期を見極める難しさも学びました．

写真4 エンジン棟のチューリップ

写真5 北門ガーデンで収穫したスイカを楽しむ

写真6 北門ガーデンで芋掘りを楽しむ様子

本同好会は，つくば市の「花と緑の市民協働事業」[3] の活動にも参加しました（写真 7）．これは，市から配布された苗をプランターに植え，道路沿いや公共スペースに設置し，地域の景観向上を図る取り組みです．同好会では，北門付近の一般道沿いにプランターを設置しました．花を綺麗に見せるためにプランタースタンドも作製しました．マリーゴールド，ベゴニア，サルビア，パンジー，ビオラ，ノースポールを植えました．こうした取り組みを通じて，地域の活動にも積極的に参加していきます．

同好会の活動を通じて，私は多くのものを得ることができたと感じています．なかでも特に印象に残っているのは人とのつながりです．普段の業務では関わる機会が少なかった所員とも，活動を通して自然に会話を交わすようになりました．一緒に作業をするなかで互いの人柄を知り，活動以外の場でも気軽に声をかけ合う機会が増えました．同好会で過ごした時間は，所員同士の距離を少しずつ近づけてくれたように感じます．また，野菜を自分たちの手で育て，収穫する経験を通じて，日頃何気なく口にしている食べ物が，多くの時間と手間をかけて作られていることに改めて気づきました．花や野菜に詳しくなくても，仲間と作業しながら楽しく学べることも，この活動の魅力の一つです．同好会の活動は，野菜を育てるだけでなく，人とのつながりを育み，日常の当たり前を見つめ直す貴重な機会となりました．本年も芋掘り大会が開催される予定です．花や野菜を育てるように，部署を越えた所員同士のつながりも大切に育まれていくことを期待しています．

写真 7 花と緑の市民協働事業 [3]

参考文献

1) 寺田雄太郎 ほか: JARI 技術フェア 2026 開催報告, JARI Research Journal, Vol. 2026, No. 6, JRJ02060602 (2026), doi:10.60458/jarijrj.JRJ20260602

2) 寺田雄太郎 ほか: JARI Open Day 2026 開催報告, JARI Research Journal, Vol. 2026, No. 6, JRJ02040603 (2026), doi:10.60458/jarijrj.JRJ20260603

3) つくば市: 花と緑の市民協働事業, 公式ウェブサイト (2026) , https://www.city.tsukuba.lg.jp/soshikikarasagasu/shimimbushiminkyoudouka/gyomuannai/2/2/1013157.html, (参照 2026-08-28)

JARI Research Journal　掲載区分

掲 載 区 分	記　載　概　要
研究速報 Research Report	背景，目的，方法，結果，考察といった一般的な研究論文の体裁を持った記事.
技術資料 Technical Report	一般的な研究論文の体裁ではないものの，新たな知見または価値あるデータを報告する記事.
調査資料 Survey Report	他機関より得られた資料，データを元に，新たな知見を報告する記事.
解　説 Review	特定の分野やテーマに関して，「現状の最新動向」や「研究・開発状況」などをまとめ，要約・説明する記事.
研究活動紹介 Research Activity	一般的な研究論文の体裁ではないものの，JARI の研究活動や各種プロジェクトなどを紹介・報告する記事.
トピックス Topics	JARI の「研究活動」以外の「活動」等について客観的に事実を報告する記事.
講演 Lecture	JARI のイベントでの講演(含む所外の講演者)をそのまま原稿に起こした記事.
巻頭言 Preface	特集号の冒頭記事．特集したことの解説や特集内容への JARI の取り組みなどを記述.
エッセイ Essay	「研究活動紹介」や「トピックス」と同様に，JARI の活動や関連する話題を取り上げるが，筆者の視点や主観を交え，軽い語り口で親しみやすくまとめた記事.